
乗り越えて、またいつもと同じ《銀魂・沖神》

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乗り越えて、またいつもと同じ《銀魂・沖神》

【Nコード】

N0587R

【作者名】

朝露詩奈

【あらすじ】

会ったたびに喧嘩ばかりする沖田と神楽。

しかし沖田は、淡い恋心を神楽に対して抱いており……。

そんな中、2人を引き裂く事件が起こる。

沖田目線で話が進んでいきます。小説……というか、日記というか、むしろポエム的な(?)感じですよ。

喧嘩（前書き）

注意！！

沖神CPです。

沖田のキャラがすごく崩壊しています。

もはや小説なんていえるものじゃありません。

以上が「無理！！」という方は戻るボタン推奨です。

喧嘩

出会うと、いつもケンカをする。

俺たちの関係は、いつもそんな具合だった。

今日もまた。

いつもと同じ。

仕事をサボって公園に行くと、チャイナ服の後ろ姿が目に入った。

「おい、チャイナ」

俺はぶっきらぼうに声をかける。

会う事ができてうれしいという気持ちが顔に出ていないかどうか、
気にしつつ。

「何アルか、サド野郎」

小さな口元を結んで、チャイナは俺を睨む。

はつきり言って、あまり怖くない。それが可笑しくて・・・むしろ
可愛くて、俺は笑いを必死にこらえた。

「ふん、相変わらずボケたような面しやがって」

わざと、気持ちとは反対の事を言った。

するとチャイナは不機嫌になる。

不機嫌なチャイナも、俺は好きだ。

事故

「ケンカ売りに来たアルか？どうなっても知らないアルよ」

チャイナが傘に手を掛けるので、俺も木刀を握った。

もちろん本気を出すつもりはない。いくら相手が夜兔族の怪力娘だとは言え、女の子なのだから。

チャイナの傘が目前に迫っている。

俺はチャイナの肩に狙いを定め、木刀を振った。

木刀は彼女の肩に当たり、彼女は地面に倒れるだろう。

しかし、すぐに起き上がるだろう。そして、俺に反撃してくるだろう。

俺は、そこで負けたふりをしてやるのだ。

よろめいて、足を押さえて。

そのはずだった。

けれど、女というのはなぜ、こう妙なところで無邪気なのだろう。

「わあっ、アゲハ蝶がいるアル！」

チャイナは歓声を上げ、その蝶を追いかけようとしたのだ。

彼女の体の向きが、急に変わる。

だから俺は手元を誤った。

その細い首に、一撃を食らわせてしまったのだ。

チャイナは意識を失い、倒れる。

硬い砂利の敷き詰められた地面に。

スローモーションのようだった。

俺はその体を支えてやろうとしたが、距離感ゆえ、手が届かなかった。

チャイナは地面に、頭から叩きつけられた。

俺のせいだった。

全て。

俺は自分で救急車を呼んだ。

ああ、遠くから近づいてくるサイレンの音が、耳にやけに大きく響く……。

謝罪

夜兔というのは、とても体が頑丈だという。

それでも、アイツは頭蓋骨を骨折したのだ。

病院で彼女は、2日間眠り続けていた。

俺はその傍で、必死で祈った。

チャイナを死なせないでくれ、と。

その願いは通じた。

チャイナがゆっくり、目を開けた。

「・・・サド」

話すと頭が痛むのだろうか。

苦しそくに顔をしかめていた。

「あのと、公園には誰もいなかったアル」

チャイナは、ゆっくり、そう言った。

「大丈夫、通報なんて、しないから」

チャイナは馬鹿な女だ。

そして、俺も馬鹿だ。

俺はその言葉に甘えた。

・・・武士道も何も、あったもんじゃねエ。

旦那は相当怒っていた。

当たり前だ。娘を傷つけられたようなものなのだから。

でも、「神楽が別にいいのなら」と、通報はしないと聞いた。

ごめんなさい。

俺は、頭を下げることしかできなかった。

悲嘆

チャイナは全快して、退院した。

脳には何の異常も残らず、体も自由に動かせるそつだ。

そしていつもの日常が戻ってきた。

ただ1つを除いて……。

例の事件から2ヶ月後。

公園で、チャイナに出会った。

俺は声をかけられない。

チャイナもまた、俺を無視する。

仕方の無い事だった。

でも……苦しかった。

さりげなく近くに寄った。

するとチャイナは、逃げるようにしてどこかへ消えて行ってしまふ。

チャイナの方が、ずっと苦しいだろうに、俺は何ていう自分勝手なやつなのだろう。

俺はただ悲しかった。

俺が悲んでいる場合じゃないのに、悲しかった。

屯所に戻り、ぽつりと呟いた。

「チャイナ」

また、呟いた。

「・・・神楽」

またあの頃のように、ケンカでも何でもいい・・・話せる日が来たらしいと思ふ。

和解（前書き）

最終話です。

読んでやってください！

和解

翌日も、公園にチャイナがいた。

俺はチャイナに近づいた。

チャイナは逃げようとする。

嫌がられるだろうなって、分かった。でも、俺はチャイナの肩に手を掛けた。

「……こっち、向け」

チャイナが、ゆっくり振り向く。

ふんわりと、一瞬だけ甘いシャンプーのにおいがした。

「……ごめん」

俺は深々と頭を下げた。

彼女は、あの綺麗な青い目を驚いたように見開いて……

「っ、私こそ、ごめんっ……沖田……」

泣きそうな顔で、そう言った。

「私、今まで意地張ってて……でも、お前みたいなサド野郎でも、話せないと……」

寂しかった。

チャイナはそう言おうとしたんだろう。

でも……このセリフは俺が。

俺は、神楽を抱きしめた。

「寂しかった」

チャイナは、また目を見開いて……

それから、笑った。

見る者を皆幸せにするような、その笑顔で。

俺はこの後、好きだよって言うだろう。

そして、神楽を抱く腕に力を込めるだろう。

神楽は・・・何と言うのだろうか。

和解（後書き）

終わりました。

勢いに乗せて書いたら、意味の無い話に・・・（汗）

ここまで読んでくださった方なんて、いるんでしょうか???

できれば、評価お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0587r/>

乗り越えて、またいつもと同じ《銀魂・沖神》

2011年2月20日19時20分発行